〈研究ノート〉

保育士養成大学における学内子育て支援の意義

木　村　美知代

1　はじめに

(1)　本稿の問題意識

本学では、2008年度教育・学習方法等改善支援で、「大学を拠点とした共に生きる地域社会の構築―子育て支援活動を基盤とする教育実践の展開―」の課題のもとに「子育て教室」を3年間実践し、理論と実践が統合された実践的な応用力を身につける機会を設けている。

1年次導入教育の「子ども学演習」において大学生が直接・間接的に幼児との触れ合い活動に参加することで、実践的な基礎を学びとることを目的としている。そして、3・4年次対象の「総合演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」においては、幼児と触れ合う活動に直接参加し、企画や準備、反省会の段階まで授業に組み込むことで総合的な実践力の養成を行うことを目指している。

文部科学省は、中央教育審議会の答申を受け、2006年度「幼稚園における親の子育て力向上推進事業」を手始めに、2008年度の幼稚園教育要領改訂の基本方針に「子育ての支援と預かり保育の充実」を示し、活動の内容や意義を明確化するように明記している。

また厚生労働省は、保育所保育指針2008年度の告示内容に、保育者への支援を保育士の業務として明記するとともに、その指針の第6章で入所

する子どもの保護者に対する支援と地域における子育て支援を示し、保育所の特性を生かした支援、子どもの成長の喜びの共有、保護者の養育力の向上に結び付く支援、地域との連携などを明記した。

まさに、これからの保育者養成校は、学生が乳幼児や親の心理を多様に理解し、状況に応じたかかわり方をすることに加え、親の子育て力回復と向上を支援する力をつけることが求められることになったのである。

そこで、私が着任した2009年度と2010年度の「総合演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」で実践した「子育て教室」の2年間と、「子ども学演習」の2年間の経過と問題点を明らかにし、今後の養成大学における子育て支援の意義や役割、あり方を明確にしたい。

2 「子育て教室」における取り組みの経過と実践の内容

(1) 昨年度（2009）の実践と問題点

ア　実践の内容

2009年度は教員2名が、「総合演習Ⅲ・Ⅳ」4年生13名と、「総合演習Ⅰ・Ⅱ」3年生3名のゼミで、年間8回実施した。

毎回、ゆったりと遊ぶ時間をとり、親同士が親しみ合い、子育て相談をするなどのサロン的な雰囲気を醸し出し、学生の手遊びやリズム遊びを取り入れたり毎回簡単な製作を楽しんだりした。

時には人形劇団を観劇したり学生企画の忍者ごっこを行ったりなどした。2008年度より回数を1回増やした。

参加者は日によって2～58組と変動したが、平均30組程度でリピーターが確実に増えた。

イ　保護者の問題点

最終日、保護者にアンケートを書いてもらったところ、31名全員が

「良かった」と答えた。しかし、親のアンケートで次のような問題点が寄せられた。

問題点①　座る場所もなかった

「事前に予想して親子が楽しく遊ぶことができる場所や玩具を準備すべき」「人数が多すぎて遊ぶ場所がなかった」と、保護者から苦情が出た。前回の参加者が3組だったため、次回に58組が参加するという予測を立てることができなかったため、座る場所もなかったのである。

問題点②　学生にもっと多く遊んでもらいたい

保護者は学生が子どもと遊んでくれるから自分は他の保護者と語らう時間がとれると考えていた。ところが、我が子と遊んでもらえなかった保護者から苦情が出た。また、積極的な学生ばかりでなく、子どもとのかかわり方に戸惑う学生もいた。個のかかわりをもとめる保護者や積極的に学生に遊んでもらうことを期待した保護者は「学生にもっと多く遊んでもらいたい」と不満をもった。

問題点③　開催回数を増やしてほしい

2008年度は年間7回、2009年度は年間8回「子育て教室」を実施した。しかし、参加した保護者はこのような機会をさらに求め、回数を増やしてほしいとアンケートに書いたり、教員、学生に繰り返し希望を述べていた。未就園児の保護者にとって、大学が行う子育て支援は情報過多・利益主義に踊らされない安心できる教育を親子で受けることができる特別な会と感じていると思われた。

問題点④　自由な時間は少しにしてほしい

一人の保護者の意見ではあるが、自由に遊ぶ時間が長すぎて、どう過ごしたらよいか分からない保護者とアンケートに述べた保護者がいた。

「子育て教室」に参加する意義が分からないため、子どもの発達にあった玩具と遊ぶ楽しさを感じ取ったり、子どもが楽しむおもちゃで遊んだり、家ではしない遊び方に気づいたり、他の保護者と話したり、他の幼児や学

生と遊んだり、教員に質問したりといった、「子育て教室」の良さに気づかない保護者がいることを知った。

ウ　学生の問題点

学生達から次のような問題点が提起された。

問題点⑤　　1・2年生が参加する機会がなかった。

3・4年生のゼミが中心になるため、「子育て教室」の様子を見ていた学生は「どうして1年生や2年生はできないの」と、質問してきた。

確かに「総合演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」を中心としてきたので、他学年の参加の機会がなかった。

問題点⑥　　希望する者の中に入れない学生がいた。

空き時間に偶然「子育て教室」を見たり、興味をもってガラス越しに観察したりしていた2年生は、3年生になって「子育て教室」開催のゼミを選択した。

ところが、「子育て教室」を実施する「総合学習Ⅰ・Ⅱ」は1人の教員の1ゼミで、8名という上限があり、希望する者の中に入れない学生がいた。「総合学習Ⅲ・Ⅳ」は2ゼミだが昨年度から引き継ぐため、新たな学生は参加できず、3・4年生の門は狭かった。

(2)　今年度（2010）前期（5～7月）の実践

ア　大学教員の特徴を生かしたコース制と定員制

昨年希望するゼミに入れなかった学生達の希望を受け止めた教員3名が、ゼミに「子育て教室」を取り入れた。

新たに3名を迎え、教員が5名になったのでコース制にし、定員を定めた。

また、大学教員がもつ専門性を地域に開放することが分かるタイトルにした。

Ａコース「幼稚園や保育園のように遊んでみよう」
Ｂコース「できるかな？ 親子で一緒に運動遊び」
Ｃコース「子育てを語り合いましょう―子育ての楽しみや大変な点について―」
Ｄコース「父の日です。お父さんと遊びましょう」
Ｅコース「地域のボランティア活動に参加しましょう」

イ　ねらいの具体化と情報発信

「子育て教室」のねらいを学生と話し合って、子育て教室が「触れ合い・育ち合い・支え合う」場となるように、保護者にも伝えることにした。

保護者には、学生の目で見た姿から幼児の発達や育ちを、写真や簡単な説明で、分かりやすく通信で書き、参加の意義を明確にした。

学生は「子育て教室」で保護者との会話の中で参加することが「触れ合い・育ち合い・支え合う」場となっていることを語りかけようとしたが、保護者に分かるように語りかけて理解を得ることが難しかった。しかし、「ひよこだより」で「子育て教室」がねらっていることを教師が説明したところ、保護者は意図的に学生や他の保護者に話しかけることが多くなり、学生と保護者との交流が間接的に深まり、学生のコーディネーター力の育ちの一歩となったと思われる。

ウ　学生指導の充実と育ち、問題点

①　合同ゼミや事前事後指導

合同ゼミでは、幼児との触れ合い方、子どもの発達の特性や一人ひとりの育ち、遊びの中で育つものを各教員から指導を受け、学び合うことができた。

また、事前指導で「みんなであそぼう」の時間に行う手遊びやリズム遊びを学び合ったり、事後指導で学生の子どもへのかかわりかたの良いとこ

ろを紹介したり、保護者や教員の感想を紹介したりしたことが、次回への意欲の源泉となった。

② 「気付きメモ」の活用

活動を終えたのち、学生が気付いた幼児の行動メモを受け取った親が、「親から離れて、学生さんや友達と遊ぶ姿を間近で見ることができ……」などのコメントを書いて返してくれる方法をとった。

しかし、自信がないためにコメントを書いても、それを保護者に渡せなかった学生がいた。後期は「気付きメモ」、必ず一人には渡そうと確認し合った。

「気付きメモ」を渡した学生は保護者から返信を受け取り、自分の関わりで保護者がどれほど喜んでいるかを知り、さらに意欲が増した。

③　事前事後指導に活かす「振り返りシート」

学生が親子とかかわり、保育全体を把握しながら実践するため、「振り返りシート」でPDCAサイクル項目に工夫を凝らし、計画（Plan）→実行（Do）→検証（Check）→改善（Action）のPDCAサイクルで自己評価自己反省を行った。

その日の全体のねらいを「乳幼児に対して」・「保護者に対して」・「かかわりに対して」の3つの側面から意識させ、PDCAサイクルの計画（Plan）で幼児・保護者に対してのねらいを掲げ、実行（Do）でねらいをもって幼児・保護者にかかわり、検証（Check）で幼児とのかかわりを振り返り、改善（Action）で自分のかかわり全体から次の課題を見つけた。その結果、学生の乳幼児理解を深め、遊びの意図やねらいをもったかかわりに気付き、幼児に添ったかかわり方を工夫し、親の心理の理解が深まる様子の理解度を自己評価で図ることができた。また、感想から学生一人一人のかかわりの傾向を読み取ることができた。

しかし、会を重ねるごとに、幼児理解に悩み、幼児理解が難しいためにかかわり方が分からなくなる学生や、保育に自信がなくなり幼児との遊び

を心から楽しめない学生の実態が明確になった。その原因は、前期のように全体を把握することを目的としたねらいでは、相手理解が深まるほどに、ねらいが保育を理解する手掛かりとなり、曖昧なねらいが思考を複雑にさせていたと思われた。

そこで後期は、後期の「自分のテーマ」を設定し、そこから当日のねらいを計画（Plan）し、実行（Do）した事例を、検証（Check）で振り返り、改善内容を「P（Plan：計画）」へ反映するスパイラルアップを試みることにした。

自己課題の設定　　例「一人を追って成長を記録する」「異年齢の幼児の発達を知る」「安心して・安定して・その子らしく、楽しむことができるようにする」など。

P（Plan：計画）　　幼児理解や保護者理解や遊び、交流活動を充実するためにどのようにかかわっていくかという自分のテーマをもつ。〈例　一人を追って成長を記録。異年齢の幼児の発達を知る。“安心・安定・その子らしく”楽しむことができるように。など〉

D（Do：実施）　　立てた計画に沿って活動を実行する。

C（Check：評価）　　内容を「事例」で点検、評価・分析し、計画に沿っているかを確認。

A（Act：処置）　　改善や計画の継続、内容変更などを検討し、次の計画に組み込む。

エ　教員同士の連携

合同ゼミは、開催の意義や方法、会のもち方・流れ、その他、イメージを共通化・共有化する機会になった。

教員同士は事後に報告・連絡・相談を行い、準備・片付け、各回の企画を調整し、できるだけ時間を作って準備などの協力を心がけた。

後期は、会の流れに見通しがもて、細かな相談をしなくても準備や開催

ができるようになった。

オ　1・2年生参加と多数の親子参加の機会を要望に応えて設定

1・2年生が参加する機会がなかったことに応えるために、父の日に行うDコースを「子ども学総論」―以下基礎ゼミとする―基礎ゼミの学生を中心に、希望する2年次を誘って実践した。6月は3・4年次の実習期間と重なったため、1・2年次の出番となったわけである。

いつも「子育て教室」では35組程度が遊ぶことのできる広さがある。父の日の企画のため63組の申し込みがあったので、1歳児未満の広場と1歳児以上の広場の2か所を用意した。10時から1年生18名・2年生28名が乳幼児と遊び、10時40分から手遊びやリズム遊びを保護者や幼児の前で発表したあと、劇団の人形劇を観劇した。

1・2年生は「前日は心配で寝られなかった」など、期待と不安をもって参加した。実施後は「すごく楽しかった」と満足感や充実感を記述し、「3・4年生はすごい」と自分たちもああなりたいと憧れ目標を見出している。

カ　地域のサークルとの触れ合い

近隣の子育てサロンを実施している民生児童委員の方々が、入れ替わり立ち替わり参観に来た。玩具の選び方、開催方法、床の敷物、進行の仕方など全てが参考になったと、喜んでいただけた。その後、Aコースだけでなく、Dコースに子育てサロン3か所を誘ったり、一緒に見学したりして、自分たちの子育て支援に役立てる様子がみられた。

3年次ゼミの学生は地域の子育てサークルへ「出前子育て教室」の依頼を受け、夏季休業中に参加したり、授業時以外で協力したりを重ね、好評を得ている。

(3) 今年度（2010）前期「子育て教室」のアンケート結果と問題点

ア　アンケート結果（48/67名）と学生の学び

〈コース制〉「『子育て教室』に参加してどうでしたか」の質問に、48名全員の保護者が「とてもよかった34名」「よかった14名」と答え、理由には「非常に密になった」など、保護者同士の気持ちの触れ合いが増した意見が多かった。

〈会の流れと環境構成〉全コースを統一し、重複参加を可能にしたので親同士が顔見知りになり、幼児は安心して「これで遊ぼう」と意図をもって参加する子もいた。

〈ミニ講座〉親の質問に答えたり子育てについての話をしたりする大学教員のミニ講座を、A・Dコースは「おやつ」を食べる静かな時、Bコースは親子運動遊びの途中、Cコースは学生の託児で実施した。

「先生のお話が毎回心に残った」「話し合いがとてもよかった」「学生・教員によるソフト面とハード面が共に素晴らしい」と、70%が非常に満足していた。学生は「授業のあの話だね」と、授業内容を確認したり、親の質問に応えるために事前に復習したり教員に質問したりして、学びを確かにした。

イ　今年度（2010）前期「子育て教室」の問題点

問題点①　　1・2年生が参加する機会が少ない。

Dコースに1年木村ゼミ18名と2年生の希望者28名が参加できたが、他の1年次ゼミでも希望者がいたことを知った。基礎ゼミで幼児と触れ合う体験やそのための基礎的な学びの機会の充実が課題になる。

問題点②　　「黙って見守る」学生の指導が不十分。

1年生は「保育原理」の授業があるが、「保育内容」など保育の基礎を学ぶ教科の授業がない。そのためか、親子にかかわるときに自信がない学生がみられる。

特に、話すことが苦手な学生もいるので、手遊びやゲームなど、気持ちを発散する楽しさを経験する必要があると考える。

問題点③　　参加できなかった保護者への対応。

前期「子育て教室」に参加できなかったと、大学へ電話や手紙で講義する保護者がいた。

前期「子育て教室」は先着順で参加者を決定したので、後期「子育て教室」はそのことを明示することで、対応したい。

⑷　今年度（2010）後期「子育て教室」の実践

ア　大学教員の特徴を生かしたコース制の拡充

子ども学専攻以外の学生達の希望を受け止めた社会福祉学部の教員２名が、ゼミに「子育て教室」を取り入れた。子ども学専攻と社会福祉専攻の両者を受け入れている教員がＦコースを、社会福祉専攻所属の教員がＧコースを引き受け、新たに２名の教員を加え、７名の教員で「子育て教室」を行うことになった。

Ａ～Ｃ・Ｅコースは前期と同じ内容で行い、次の３コースは新たな取り組みをした。

Ｄコース「ミニ SL に乗りましょう」＊改善内容　定員 50 名⇒定員なし（318 組参加）。

Ｇコース「子育てを語り合いましょう」＊新規企画　11 月開催予定

Ｆコース「離乳食やおやつ作りを楽しみましょう」＊新規企画　１月開催予定

イ　後期の問題点とその解決方法

⑴　学生指導

対策①　後期Ｄコースはミニ SL を呼び、その待ち時間に学生が様々な企画をした。

その結果25のアトラクションを1年生が企画運営し、318組（申し込み者と当日受付の計）の親子と123名の学生が一緒に遊びを楽しむ機会となり、1・2年生が参加する機会と親子が参加できる機会を増やした。

対策②　「学外研修」の充実

2009年度は1年生の「学外研修」の事前指導は20分程度の連絡事項が中心の内容だった。本年度は事前事後指導を3回行い、心に残る実習となるように工夫した。

対策③　「子ども学演習」を充実させ、学生に自信をつけさせる。

2009年度は学生6グループが、ゼミ単位で全員が楽しむゲームを提供。

2010年度は「手遊び100連発」のテーマで、グループが手遊びやゲームを発表し、個々が積極的に参加する機会を作った。

また、「子育て教室Dコース」の企画や親子と触れ合う実践の機会を作り、学生が主体的に参加し、担当したことに自信をもって取り組むことができるようにした。

対策④　学生のコーディネーター力を育てる。

後期Dコースの学生が企画したアトラクションに、「300組の親子を迎えよう」と、様々な準備が行われ、学生相互の協力や話し合いなどが充実した。木村ゼミが核となり、そこに他ゼミの学生が参加したいアトラクションごとに活動したところ、1年生全体が一丸なった取り組みをみることができた。

また、地域の高齢者講座が「遊びの広場」に参画するなど、学年間の交流や世代間を超えた連携が行われた。多数のゼミ学生や教員の連携で、大規模な企画を立案・実践し、充実感を味わうことができた。

このような機会を通して学生は、企画内容をコーディネイトする

力を身に付けていったと思われる。

対策⑤　前期は5コースだった「子育て教室」を、後期に7コースと拡充させたため、学生は参加する機会が増えるとともに、学び合う機会も増えた。

(2)　保護者への対応

対策①　前期「子育て教室」希望した保護者が参加できなかった原因を明らかにし、問題点を発見した。

・2009年度31組参加者のうち16組が2008年度からの継続参加で、新規の参加者は15組だった。

・2009年度前期にコースや定員を増やし、Dコース50組以外に62組募集した。しかし、募集開始と同時に継続参加者35組が各コースを重複して申込んだため、新規参加者は定員超過で参加できなかった。

対策②　新規参加者申し込みを継続参加者の1日前とした。

mail・FAX・郵便が届いた時点で応募者が多い場合は抽選とし、291組を受け付け、111組（118名）に参加していただくことにした。

3　「子ども学演習」での取り組みの経過と実践の内容

(1)　昨年度（2009）の実践と問題点

1年次基礎ゼミでは、実践的な基礎を学びとることを目的に15時間のうち事前準備を2時間、実技実習指導を4時間行った。他の9時間は音楽や諸外国の教育事情などをオムニバス形式で講義した。

実技実習指導は、6つのチームに分かれ、学生が「幼児の遊び『ゲーム』」を提案し、対抗戦を行った。最後には簡単な懸賞を教員が用意し、学生はゼミ単位の対抗戦を行ったためチーム意識をもって参加し、熱気を感じ合

うことができた。1年次導入教育には、学生同士が仲間意識を感じ合う機会や学生と教員とが一体感をえる機会が必要になると考える。

ゼミ担当者が共に頑張り、仲間意識を培う機会としてかかわったゼミは、2年次に進級して各々に新しいアドバイザリー担当教員がついても、1年次ゼミ担当だった教員が相談相手となり、学生同士が1年次ゼミの仲間を受け入れ合い、折に触れて支え合い、助け合う姿を見ることができる。

子ども学専攻教員全員が協力しあえる体制と、組織として授業を工夫しあえる体制が課題と思われた。

子ども学専攻の学生の実技実習指導は、手遊びやゲームばかりでなく、幼児や保護者と触れ合う活動に参加し、そこから幼児・保護者理解やかかわり方、援助の仕方の基礎を実践的に学ぶことが目的の一つである。今後は、その方法を工夫したい。

(2) 本年度（2010）の実践と問題点

ア　本年度の実践

①　実技実習指導と幼児や保護者と触れ合う活動の指導を増やす。

昨年度の実技実習指導に6〜9回目の指導内容を加え、一人一人の学生が主体性を発揮する体験となるようにした。

1回目	9月21日	「手遊び25連発」で学生が発表する内容を構想しあった。
2〜5回目	9月25日	午前中は発表内容の相談、午後はその発表を行った。
6回目	9月30日	「子育て教室Dコース」の相談
7回目	10月5日	学外研修事前指導
8・9回目	10月14日	学外研修事後指導
10〜15回目		各ゼミによる指導

②　柔軟な対応で「子育て教室」の参加を組みこむ。

前期基礎ゼミ「子ども学総論」で、「子育て教室Ｄコース」10月3日㈰に親子と触れ合う「子育て広場の活動」を企画した。後期が始まると、他ゼミの1年生が参加を申し出るので、「探検ごっこ」や「散歩ごっこ」を増やした。さらに2年生の協力者が増えたので「電車ごっこ」、4年生の協力で「忍者ごっこ」を増やした。そして、1年生の希望者がさらに増えたので「お店屋さんごっこ」の企画が進んだ。

1年生希望者は基礎ゼミの授業で行うと誤解して参加するのではないかと考え、後期1回目の授業で、次のことを確認した。

ミニSLで遊ぶ「子育て教室Ｄコース」のねらいや今後の予定、1年次木村ゼミが中心になって親子が楽しむ企画準備をしていること、使用会場や予想参加人数、学生協力者の人数、係分担、当日の日程、近隣の幼稚園・保育園にチラシを配布し、300組位の参加が予測されることなど、木村ゼミで検討した内容を伝えた。担当した教員の配慮で説明と質疑応答に30分ほどかかったが、出席した全員が理解して参加、協力することになった。

2回目　　9月25日　　学生は「手遊び25連発」の相談を午前中に行うことになっていたが、1時間目で終え、2時間目を各自が受け持つアトラクションやお店屋さんの企画や相談、製作に取り組む時間に活用した。担当教員が臨機応変に時間の使い方を学生に任せてくれたことで、学生の意気は高まり、大変そうなアトラクションを手伝う学生や翌日からの作業場所を伝え合う学生など、協力し合う雰囲気や充実感を味わう様子が見られた。

6回目　　9月30日㈫　　「子育て教室Ｄコース」は、アトラクションの看板作りや企画書、必要物品の調達、製作準備など本格的な作業に取り組むことになった。10月3日当日まで学生たちは学食で、サークルで、空き時間に、協力しあって仲間を助け合った。他の教員の協力で高齢者カレッジの高齢者も加わり、高齢者とともに協力しあったアトラクションも

あった。

結果として30分の説明・打ち合わせと2回の授業で、318組の親子が集う会を迎えることになった。

③　大学教員の連携・協力

「子育て教室」の関係教員は、3・4年生のゼミで学生の気持ちを高め、事前準備や当日に活躍し、各アトラクションを学生と共に楽しむ姿が見られた。

子ども学専攻以外の教員は学生に吹聴したり、社会福祉学会誌「Sジャーナル」の学生取材を手配したり、ミニSLで様々な問題を処理したりなど、多様な協力があった。

高齢者は「楽しかった」と参加を評価し、保護者アンケートでは「学生や高齢者が優しく親切にしてくれた」と好評で、異世代間の交流は、時代が必要としていることを感じさせた。

勤務の都合で参加できない教員は、電話やメールで気持ちの応援やその時々に必要な助言、アンケート作成の助言などの協力をしてくれた。

イ　問題点とその対策

2年生は駐車場係や案内係など当日の混乱を適宜処理する力を発揮した。しかし、1年生に自分たちが座る机や椅子を準備させ、そこでお喋りを楽しんだり、1年生の準備不足を指摘したりなど、2年生が企画に参加しなかったためのトラブルや1年生が上級生に協力を求める難しさが発生した。

2年生ゼミで企画し、1年生に協力を求めたり指導したりする組織であれば、このような混乱はなかったと思う。また、3・4年生の専門ゼミが実力を発揮する場となれば、子ども学専攻の理論と学びが一体となった組織となると考えられる。

子ども学専攻の基礎ゼミは、幼児と保護者と直接触れ合う中で、楽しさや様々なかかわり方、援助の仕方を学んでいく実践的な学びから、理論を

理解しやすくすることが重要となる。また、1年次で学年の仲間と一体感を味わった学生は仲間や教員とのつながりが強くなり、これからの学習の心の支えがもてた子がうかがえる。

そのためには、年度当初から教員が一体となる計画を立てる必要があると考える。各教員の協力が得られる組織づくりを工夫したい。

4　考察

(1)　大学の子育て支援の意義と役割

ア　子どもの成長を実感、子育てを支える存在となる

振り返りシートで学生の学びを確かにし、親に渡したところ、それが親にとって我が子の成長を実感する機会となった。また、学生は親と一緒に幼児を支える存在となった。

イ　学びの姿の読み取りと情報発信

子どもが遊びの中で面白さを追求した結果として学んでいることを学生が読み取り、一人ひとりの成長の姿を親に伝えるとともに、地域へ情報発信することが地域の子育て支援力の向上につながることが明らかになった。

ウ　参加する意義が実感できる

前期「子育て教室」に参加した親のアンケートで、全員が「よかった」と答え、「学生との触れ合いがあって……」〈触れ合い〉「今まで気付かなかった幼児のことを発見できたり教えてもらったり……」〈育ち合い〉「下の幼児連れでも、学生や先生、他の人が見てくれるので安心して……」〈支え合い〉などと書かれていた。

無意識に我が子の良さや寄り添う楽しさ、気持ちを理解する大切さを学び、幼児同士が刺激し合い、親同士がつながりを深める実践のねらいを受

け止めていた。会に参加する意義を実感させることが、親や学生の子育て力や支援力向上につながることが示された。

エ　学生のコーディネーター力を育てる

後期「子育て教室Dコース」に参加した親のアンケートに97名中52名の保護者が「とてもよかった」と答え、43名が「よかった」と答えた。「こんなにおおがかりなイベントとは思いませんでした」「視点がよかった」「どこの市町の子育て支援より最高に良かった」「家に帰ってからまた、この遊びを楽しもうと思います」と、学生が企画した遊びの良さを理解していることが分かった。

また、学生アンケートの、自分自身にとってためになったことの項目で、「授業では知ることのできない、本当に子どもの興味・関心のあるものを、実際に触れ合うことで知れた」「年齢によってぬり方、絵の描き方の違いを実際に見ることができた」など、子どもや親との触れ合いから様々なことを学んでいた。

取り組んだことへの意識調査の項目で、ほぼ全員が全力投球、かなり一生懸命だったと答え、実施前は嫌々だった2名がかなり一生懸命に取り組んだと変化し、嫌々のままは1名に留まった。改善したいことの項目では、「準備をもっと早くからやったほうがいい」「こういう機会を増やしたい」「臨機応変に的確に動けるようにする」など、今回の反省を次回に生かそうとする考えが積極的に示された。

全体を通して自分たちで企画・運営した楽しさや手ごたえを実感していたことがうかがえた。

(2)　大学の機能を活用した子育て支援のあり方

ア　学びの連鎖を育む

出前子育て教室、地域サークルから見学、大学が企画したイベントに参

加など、学生や親子の学びが地域へ広がり、学びの連鎖を育むことが、地域の育て力向上につながる。

イ　親と子と学生の共有体験・活動の場の設定

全学年の学生が親子と接し、ともに参加し楽しむことができる活動の場を設定することと、それぞれの力が発揮できる出番づくりが必要になる。

ウ　目標をともにした連携

同じ目標のもとに力を発揮しようと連携する機会をつくると、学生や大学教員が有機的なつながりをもって協力するようになる。

⑶ 「子育て教室」を活用する「子ども学演習」

「子育て教室Ｄコース」は１年次の１ゼミから出発し、１年生や２年生の学生の協力とそれを支える教員の協力を得て、次第に大規模な企画へと変化した。規模が膨らみ、無謀ともいえる計画だったが、学生や教員の協力で成功を収めたと言える。

シラバス作成時に、「子ども学演習」の目的を「実践的な基礎を学びとること」にし、「子育て教室で触れ合い活動を行う」ことが総合的な学びの機会であることを確認しあったなら、教員が異動しても担当者が変わっても「子ども学演習」をさらに意味あるものにしていくことができたと思う。今後は「子育て教室」を活用することを「子ども学演習」に位置付け、組織として取り組むあり方を探りたい。

5　成果と今後の課題

親は「子育て教室」で、大学教員がもつ専門性に触れる機会となり、我が子の良さを再確認し、自分を振り返る機会となった。学生はそこで子育

て支援力を身につけ、「子育て教室」が親子相互に子育て支援力を高め合う場となった。また、教員にとっては新たな研究課題を見出す場となり、各自の研究を深めることになった。

しかし、今回の実践は親の子育て支援中心になりがちになっていた。

今後は、学生の子育て支援力の指導についての検討や、保育所保育指針や幼稚園教育要領の改訂に伴った保護者支援や、親の子育て力の回復や向上に於ける学生が身につけるべき支援の内容や方向の検討、さらに、学生のコーディネーター力を育てる「子ども学総論」や「子ども学演習」「その他の企画や方策の検討」など、学生指導についてさらに検討したいと考える。

参考文献

幼稚園教育要領解説　文部科学省編　20008　フレーベル社
幼稚園教育要領の解説　小田豊/神長美津子編著　20008　㈱ぎょうせい
保育所保育指針解説書　厚生労働省編　20008　フレーベル社

※　同朋福祉編集委員会規定により「研究ノート」としての査読済み

（本学准教授・幼児教育）